

蓑笠雨談 下

45  
1268  
3



1268  
3

遠  
1462  
3止  
卷



養笠雨談初編卷之三

東都

曲亭馬琴著

○鬼貫の傳 同道

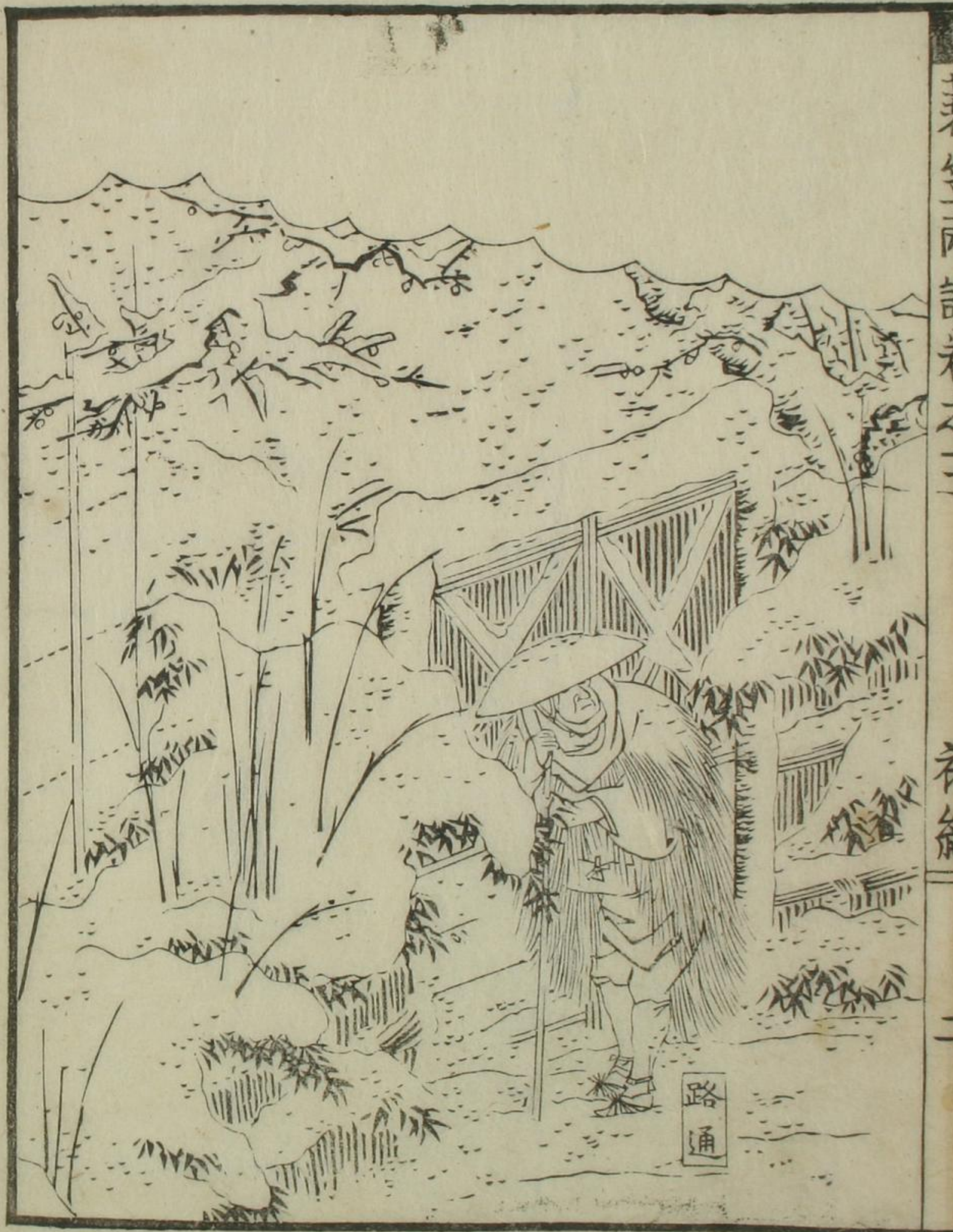
鬼貫姓の上嶋氏俗稱い手惣在。模範翁と号し、振州  
 伊丹の人なり。後大坂の家へ移り、姓を平泉と更じ、  
 維舟及宗因と号す。後一家をたると、鬼貫獨玄同  
 勺、遷ホ世に移り、元文三年八月二十七日、七十八歳  
 伊丹黒深寺に墓あり。浪花中或人の語に、鬼貫中  
 ろの幼きを、あや、あや、和州郡山彦の足煙、  
 その後大坂より移り、小見の足、  
 里ぬ、今も大坂に鬼貫道引と云、小見の療治、  
 上り、按摩の法のことなり。

養笠雨談卷之三

初編

一





路通

曾中自有  
 千金咏  
 囊裡應無  
 一貫錢

權花翁



若菜子あきまのの水を汲せ置あけ堀の枯草をおきて  
 新水におくお水出下されく。蓮生のゆめとおくめあふ  
 あととあまの採花を娘おとらせく又よきつりやち結あ  
 くれ死んじけなして母を思ひて父のふところふ人となれり。  
 りとて又ハ仇一ちたうを切る。このあまを國をおさ免  
 身をさる室とや。ゆきゆきと食ふせまりて子をたさけ  
 さら死をころもとのとれ。うなれ。よもあまはこそ父れ  
 母のいけなをど。又又身をさくとも父の賢父の無うさ  
 ぬの罪となる。おとら河竹の流し流し代をさりて孝了  
 久んとあくとたれく声をさる。時よあれさるをたさく  
 院空く杖を曳て久く面せ。踏通来る。僧路通ハを  
 後遺親子あつて面を久く又を箱よおさめたが。娘はかく小

おとせ入りのぬ鬼貫そのとつむよ志のむき。あつぐれとを  
 語の路通しあのでく涙を落し。人の内くあのをさるを  
 歎。鼻うちかきていつけい。死をくさど賣つてど。ちん  
 ちんひ子を救ふられよとらの樹ありと鬼貫が耳一口をわ  
 けて。ええ。その後鬼貫幸をたけ。振く。世をさる。下界  
 かくしの鬼貫及引のり疑う。さ。りちらん鬼貫を中より  
 この名よく。人は名をあせさる。と。て。の。説。の。ど。く。なる。一。  
 ○このを三勝が古墳并笠屋三勝が辨  
 このを三勝が墓ハ大坂難波新地法昌寺金毗羅堂のあふ。  
 系伝のむらひあり。世俗この寺を千日寺とさる。七月廿七日  
 この地の友ともよ。あまおびて三勝が古墳をさる。石塔あま  
 南無阿弥陀佛の名号を彫つけ。外又法号なり。予が加ひく

雕窩主人

ひびき  
秋夜  
かきこ  
花子も  
なま  
あま  
うらな  
いふ  
なり



追考

予このま  
考書  
了るの  
元禄八年十一  
月六日大坂長  
町之を予光  
無つが娘  
和歌  
人  
こ  
村の  
自  
久  
し  
世  
世  
所  
五  
あ



世の  
あ

三  
墓

五



をいへり。あれを女奔大頭と名づく。この舞は岩大用天地拍  
 子。羅生門などいふ傳授れ舞あり。とて永祿のころ室町家よ  
 り祿ありたる舞女は笠屋長といふものあり。其ころ室町殿  
 物語よとえたり。あれ笠屋と名づくれいふれ。その子孫は笠屋  
 新傳。同万傳。同春傳などいふ女あり。その寛文のころまづの  
 女奔ん。三傳もこの門よりせり。女奔く由緒あるものあり。お  
 伎ねと伝ふ並木五瓶といふもの。三傳かいつて。天冠を  
 馬橋と奔ん。天明四年十月桐長桐芝居貞形。免絳の  
 大鞍一挺あり。あれいふ。女奔の遺風は。三傳  
 の寛永のころ既よ左女あり。京は伝せり。といふ。この一糸醒世  
 子の説なり。お苗をせしといふものと。お苗の死をせり。三傳ハ





大坂とて西領風俗はなほかえりし 志するを先年伎社をあらむうの笠登  
 小元と時を同じせりおことお湯女んき 三務が高名をかきて。笠登よそのや野もよくその名をとるとも三  
 務といへば。ねえ他志のそまにあそびかへりたりなきを。後人  
 笠登三務が事跡を考も。戯文の流は涯まで。三務が家へ長  
 町の傘屋たりし。平がし附會の流をまよよとてあめとまれ  
 かくそま。三務が墓はもと。只何とあそびたりてそのあまはこま紀  
 りあそびあそびし。此を論じても。又こが黨は一癖あり。

○ 梶久が墓并るうたんとこの圖説  
 梶久が墓は大阪八丁め寺町実相寺が堂東南の方よりあり。宗  
 達之墓と志るせり。没年の延安年中あり。その家は大坂筋にあ  
 たりしといひ旧姓今詳ならず。又梶久が墓布せし石の手水鉢  
 大坂が額寺書院の庭よりあり。正保三年十二月九日梶登久墓

寄進の數々字を刻し。予墨かとして山東主人おおれ。彼人  
 此れを自伝の集のせむをのりて。あま圖せ浪荒古老の語は  
 梶久のそそ免老實や。嘗て花街は地をふまじ。同庚の社  
 友あれをあさけり。強く青樓は誘ひてつかめんと。梶久が  
 母を多くこのそそをめてあそびたり。やせひいん。俄に文を  
 ら。松山よ志るぐのそそつげ。梶久がそそをのむ。梶久これ  
 あそび。母は解別し。花街は越んと。母の云。商人の利は  
 きて。はつひのそそ。廓あそびたはびて。はつひあそびをそそ  
 ら。そこのぞと。これ松山の金盛たひ。あそび。あそびや  
 たりと。此身花街はあそびをわあそび。彼をよと。梶久母の命  
 をけり。遠よとの友と。あそび。友人おのそと。梶久が  
 母をよむ。梶久一人熱女はあそびをわあそび。笑人と。梶久母

の教を習て松山をよぶ。松山よりして一別の會話を叙ると。おさく  
 相おねるが如し。元旨あつたなほ。器を記羞梳久もいづら。くも  
 おひねるうら。後よりあらしひ。さくも。房子入る。いづりける。これ  
 元より。ゆ身をあらふ。さくも。をさる。の如く。さくも。わい。あ。さくも。ま  
 ろえ。絲。さ。さ。ど。ゆ。身。が。情。あ。ま。あ。ひ。の。さ。づ。う。わ。を。免。た。り。と。驚  
 こ。れ。を。謝。す。松。山。う。ら。笑。み。あ。れ。を。う。これ。も。お。母。君。の。い。ら。う。こ。も  
 ち。れ。お。あり。と。さ。づ。ぐ。の。り。を。結。る。梳。久。さ。づ。め。母。の。意。を。あ。れ  
 を。感。ず。且。松。山。が。情。あ。ま。さ。さ。う。を。さ。く。終。り。家。を。さ。う。あ。ふ。い。づ。も  
 け。ら。と。ち。ん。梳。久。が。紋。い。扇。車。な。り。う。あ。や。な。の。り。曲。三。味。線。お。ま。え。い  
 ち。亦。宝。永。の。さ。り。飄。草。う。く。と。い。の。扇。法師。松。山。を。悟。理。し。と。も  
 人。を。興。ず。或。い。河。系。も。さ。ら。或。い。市。中。を。俳。徊。せ。し。と。あり。さ。る。俳。伎  
 程。も。お。梳。久。と。の。あ。ら。う。た。ん。り。と。を。附。會。し。て。仕。了。し。之。を。叙

伊勢の風流 愛敬昔好色 卷之二  
 後のと巻 三



昔男といふ冊子。へうせん  
 くくが。因。あり。暮。り。て。あ。ま  
 の。載。と。

曲三味線 卷之二

右のいよ。澤。お。名。を。結。せ。梳。久  
 昔。の。姿。あ。の。さ。ふ。し。喜。ん。だ。や。天。恵  
 お。立。信。比。布。子。九。分。け。の。お。と。帯  
 草。中。の。お。名。の。お。死。が。う。さ。と。こ。ろ。お。細。帯  
 天。目。吸。口。の。お。せ。せ。る。さ。ら。め。の。皆  
 足。袋。細。緒。の。お。お。は。ら。う。て。た。ら。ぬ  
 そ。の。い。扇。車。の。紋。お。今。も。智。恵。い  
 お。さ。さ。う。か。鳥。を。せ。せ。り。下。界

この曲三味線ふき腕久之が歩掛りへうえりくぐ模極きもまこと。  
 近世後詮よ名な穴ハへうえりくぐ江戸の志道新へ又腕久之が  
 を小曲よりし。眠近竹といふ冊子ハのせたる。腕久之の終れをい  
 たり。今の唱寄とまはあはれうりわらう。眠近竹の唱寄をよ抄出  
 あれらるをいもへうえりくぐが工を附ませしをあらわす。まうき  
 もまはれはてまうが。夜話の一助ともなるんうとあらはし。附と。

コん久ら終 三上リ

一中ぶー

上唇  
 ほとぬまきこのまはり。今の袖よ今のあせ。のののの  
 むらの中はおはらり。まはらりあつたの。まはらりの代をさど  
 こまはらり終り。まはらりのひらき。あはらりの本のちと。あ  
 はらりといはら。あはらりの花のわり。まはらりのあはらり。あ  
 はらりといはら。法師が一ふふまはらりまはらりまはらり。あ

まはらりあはらとまはらうせき。あはらりまはらりまはらり  
 がの君こそ。まはらりらりやまはらり。あはらりのあはらりま  
 はらりがこうまはらり下畧  
 まはらりか。あはらりとあり。あはらり新町の廓とまはらり  
 まはらりあり。腕久之のまはらりまはらりまはらり。

○扇を夕霧か墓并畧傳

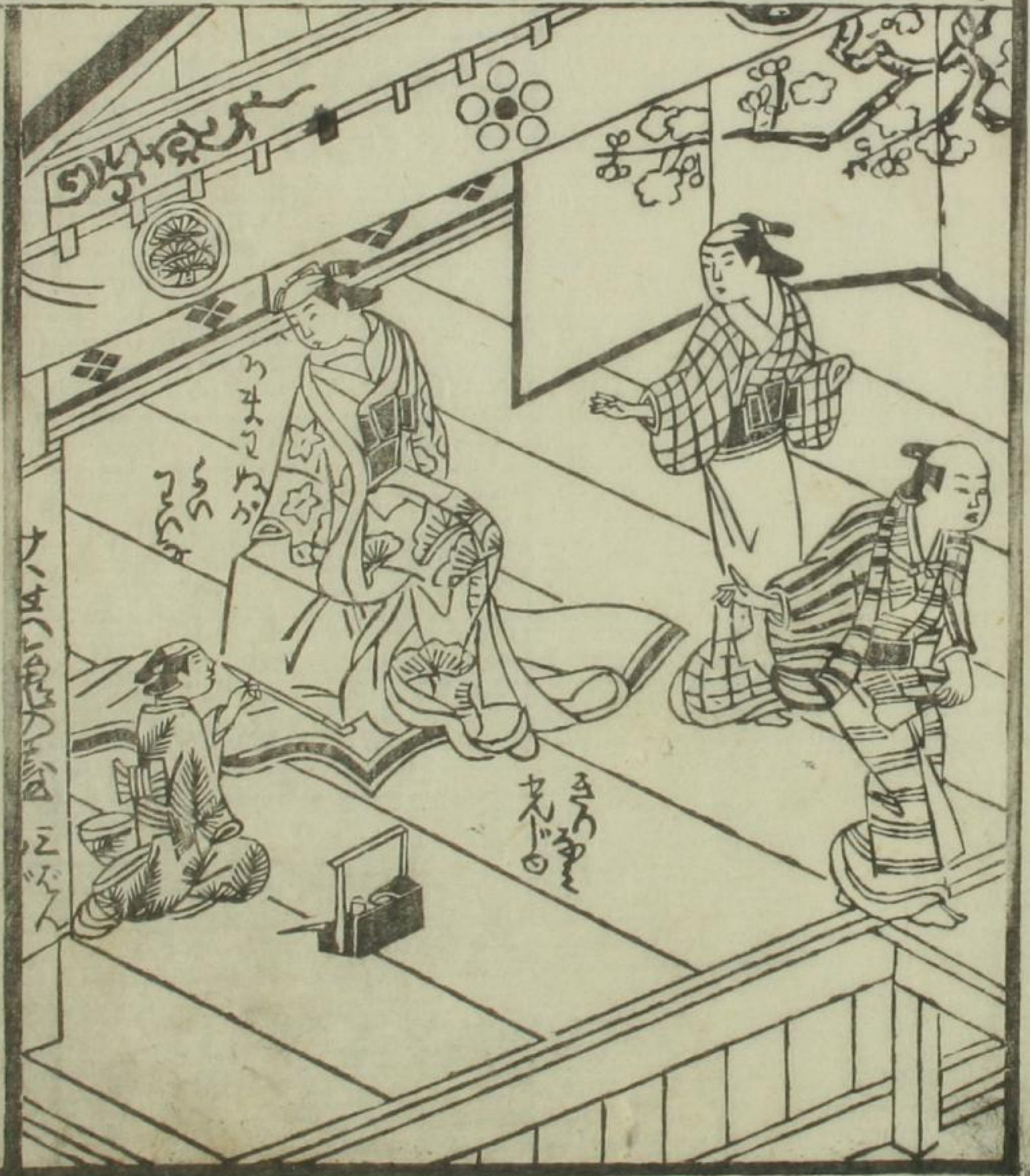
七月晦日大坂下寺町海通寺(夕霧)が墓(扇)あり。その墓(扇)堂  
 の東殿(扇)西向あり。棹石ともふた殿(扇)高廿六尺(扇)あり。一  
 正(扇)面(扇)の(扇)苑(扇)岳(扇)芳(扇)春(扇)信(扇)女(扇)の(扇)六(扇)字(扇)を(扇)刻(扇)し。西(扇)の(扇)取(扇)手(扇)は(扇)延(扇)宝(扇)三(扇)百(扇)五(扇)十(扇)年(扇)  
 正(扇)月(扇)六(扇)日(扇)俗(扇)名(扇)あり(扇)や(扇)夕(扇)霧(扇)と(扇)彫(扇)入(扇)り。今(扇)を(扇)ま(扇)る(扇)に(扇)百(扇)五(扇)十(扇)年(扇)  
 貞(扇)人(扇)む(扇)し(扇)一(扇)個(扇)の(扇)土(扇)煙(扇)路(扇)と(扇)仕(扇)ど。ひ(扇)ろ(扇)丹(扇)の(扇)鬼(扇)貫(扇)と(扇)の(扇)寺(扇)ハ  
 猶(扇)あり。この塚(扇)の(扇)柳(扇)なく(扇)ても(扇)あ(扇)ら(扇)れ(扇)ん(扇)と(扇)ま(扇)ん(扇)一(扇)も(扇)亦

百年のむくあり  
 びんきり全盛抜群  
 ありー正のまぶりの  
 書が片一京初より  
 ち免く大坂一車  
 ずいん寛文十二年  
 の正あり。ち美れ  
 引松かきをつまむ  
 と。女房うりちま  
 るといふ。そのち大坂  
 お阿波を何かといふ  
 ちのむくして。女房が



享保二戌年正月

病中も心を癒して  
 のころぬ。この人を  
 九郎町の吉田を去  
 九郎町客ありと  
 そ。是室六年二月  
 三月より。女房女房  
 の正月といふ。女房  
 ねまをせし。女房  
 左馬よ坂田。十年  
 ありて。女房  
 一とあり。そのち室  
 永六年中ぐ女房



浴東二女房よりして いちたを坊枝

のねををせしことひと十八度ありしが。まゝていづくも驚冒  
 せしといふ。是夕芳ハハ津第一の名妓坂田ハ俳優中の名人  
 たり。一とこれありきもあつて。箕山ハ大鑑子夕芳をを鹿  
 谷沢ハ是れとも月ハ晴月ナリとある。せり近者漂漂といふ  
 もの。夕芳ガ文をのせり。美徳ハあつて。亦浪花人嚮り  
 夕芳ガ傳を述ぐ。摘要 元來夕芳ハ折屋の夕芳ありて  
 麻屋の夕芳ありて。二代めれ夕芳ハ自又といふ。その記録  
 根を某の家あり。但麻屋の金山と折屋の夕芳を附去  
 せしといふ。居館園ガ夕芳文章といふ。傳文あり。その麻屋の令  
 山と名よたら。の海に全盛とおも。花岳芳春ハこれ金山ガ戒  
 名あり。あつて。はつと。予ハの説をせり。中後ハ疑也。その  
 渡津玉キハ指ぐ。その墓をこれハ。花岳芳春ハ夕芳ガ戒

名あり。と前ハ志す。とて。ちるほさる。して。せし。あやま。とも。あ  
 る。一。又。寺。説。ハ。夕。芳。ガ。墓。ハ。今。と。り。麻。屋。を。思。は。れ。り。追  
 善。ハ。い。は。れ。り。一。又。按。は。る。夕。芳。文。章。子。其。の。あ。つ。て。は。れ  
 令。山。と。名。よ。たら。是。る。云。と。書。る。を。夫。の。令。山。ガ。る。あ。つ。て。あ  
 る。は。是。ハ。夕。芳。の。を。墓。た。る。所。也。今。も。令。山。を。い。は。れ。り。あ  
 ち。は。り。を。勢。ハ。山。と。名。よ。たら。初。め。の。事。ハ。ハ。金山。と。い。は。れ。り。あ  
 一。さて。令。山。と。い。は。れ。り。夕。芳。ガ。墓。ハ。今。と。り。麻。屋。を。思。は。れ。り。あ  
 と。縁。後。と。い。は。れ。り。は。つ。て。は。れ。り。文。面。と。い。は。れ。り。一

○浪花五人男

五人男ハ元禄頼のあれその事。元禄十四年六月六日の  
 夜大坂南久宝寺町四丁目。河内を五ヶ傍ガ雇人五ヶ傍と  
 いふもの。あつて。町中ハ。い。は。れ。り。本。を。勤。云。傍。ガ。下。人。五。ヶ。傍。と。い。は。れ。り。と



立ちあぐぬ  
浪を  
をここや  
梅の  
意



四全文七

あつちの市

極下

著作堂

庵の平云満



かきつる元九郎

葉笠雨談卷之三

初編

十三

たるより... 面ありて... 天王寺の  
 塔中... 雁金文七が奉納せり。八嶋合戦の繪馬ありしが近曾  
 天王寺回祿のとれたるを。今にかゝとある人なりき。

○近松門は也他文の自序

近松門は也。姓は秋森名は信盛。平安堂景林子と号す。越前  
 の人。一説は三河の人。少くも肥前唐津近松寺に遊學し。後洛に帰す。京  
 師の學医岡本一法子の兄。年長をたぐく。享保九年十月十日  
 没。墳墓もれを括別久智神橋の隣村の廣濟寺に遷す。遺去帳は法名あり。  
 阿禪院穆兵衛日一具足居士といふ。此の戒名に近松世より一日  
 没。おぼえさるゝ。此の辭世の詠草中みえぬ。終焉の地ハ予浪をなすに付。  
 此の筆記を亦の戲材録を  
 一読して近松が事迹をたゞり。又金屋橋熊野屋某の家。近松が

墨迹二幅あり。一ハ美人の畫贊。一ハ辭世の詠草。予より得り  
 て醒世子にゆづる。彼人來て著編み載しむるを。予も不贅せば  
 亦因性翁大明丸といふ小冊。近松が自叙あり。近松戲文小序を  
 書とせん。一ははあふ録也。

むり業苑の公け大井川の逍遙。此の管絃の船和。舟  
 文學ののちをもち。ちそを藝ふた。人をもて。そのせり  
 今け新艘は何を積。日竹本が一流。管絃あり。和あり  
 詩文あり。農業あり。商賣あり。武士のの。いさめる。せん。これ  
 相。ち。い。人。事。の。さ。い。あ。る。あ。る。松。林。の。後。記。是。翁。の。笑  
 音。風。声。水。音。九。天。の。震。つ。地。の。載。た。る。も。も。う。方。だ。四  
 性。爺。の。唐。船。つ。り。を。り。ま。り。あ。り。て。拍。子。の。り。揮。ふ。れ  
 おも。楫。を。あ。や。ふ。ら。ん。し。て。津。と。浦。く。小。子。も。り。は。え

長 三 月 廿 三 日

二 編 一 五



一ツに因く深山の奥の里にまぐりて志めんとくぞ  
策檀の權象牙の漿之筋の繕ふかけり。船系よりれ  
大吉日順風は村を流るるのせき中道大町丸

享保元年申の冬暮り日

近松序之

近松が遺りたるの硯あり後近松は二小傳ふるの硯の蓋不潔  
して事取九近而義葦叢勸懲の九字を志るるこれハ  
笠翁傳奇玉極の序小昔人之作二傳奇也事取  
九近而云云といふ縁を志る。近松小説はあををよせ  
正是あくある。よの人を笑ふ本邦の事笠翁あり

義笠雨談初編卷之三 終

月氷奇縁

曲亭主人著 繪入 全五冊

この書ハ亨徳年間孝子節婦ありて  
志あるの艱難をへくつひよりの仇をむく  
ひ一正及劍鏡の奇瑞鳥獸の恠異ホを  
論したるひるふの小説あり

義笠雨談二編 近刻

著作堂壬戌紀行

小説比翼文

曲亭子著 繪入中本全二冊

享和四甲子年正月 良辰兌行

尾州名古屋本町七丁目

永樂屋東四郎

大坂心斎橋筋唐物町

河内屋太助

江戸通油町

葛屋重三郎用鐫

書坊

